

日中同形語「勉強」「無理」「上等」「必死」の分析と 日本語教育への応用について

鈴木 基伸、湯 艶[※]、梅野由香里^{※※}

要 旨

本稿では、日中同形語である「勉強」「無理」「上等」「必死」の4語を取り上げ、それらが日本語と中国語において、意味・品詞の側面でどのような差異があるのかを観察し、その違いがどのように派生していったのかについて分析を行った。また、上記4語はいずれも意味・品詞の点で日中間でその重複のあり方が異なるが、それらが中国人日本語学習者にとってどのような影響を及ぼすのかについて考察した。結果として、意味・品詞の点で最も重複が大きい「上等」が、他の3語に比べて誤用が多く産出されること、初級前半で取り上げられて意味の面で大きく異なり、品詞の面でも差異がみられる「勉強」が誤用の産出につながらないことがわかった。また4語を通して作文する上で母語干渉が生じるため、意味だけでなく品詞までも着目する必要がある。さらに日本語における当該語彙の成立条件を詳細に観察したうえ指導する必要があることを指摘する。

キーワード：日中同形語、意味論、品詞、母語干渉、誤用分析

1. はじめに

日本語における漢字使用は、中国人日本語学習者にとってメリットがある反面デメリットもある。読み方は違うものの基本的な意味は同じであるから、文章を読むというタスクにおいては有利に働く。しかしながら、同形漢字であっても意味や品詞が異

※ 大手前大学大学院博士後期課程

※※ 大手前大学非常勤講師

なる場合があり、その際には母語の知識がかえって正しい日本語の産出を妨げてしまう。

- (1) a. 你从现在起可以独立工作了。(中)
b. 君は今から独立して働くことができる。(日)
c. 君は今から独立仕事できる。(誤用文)

(金 2017:93)

「独立」は中国語では動詞を修飾する副詞的用法が可能である。それゆえ日本語でも副詞的に使用できると考え、(1c)のような誤用文を産出してしまった。したがって中国人学習者にとって中国語と日本語とで同じ漢字を用いる語、いわゆる日中同形語を使用する際には注意が必要である。

日中同形語についてはこれまで様々な側面から研究がなされてきた。その研究内容を見てみると、大きく二つに分けることができる。一つは日中同形語の語彙リスト(データベース)を作成し、それらを日本語と中国語の意味の対応関係によって分類するものである。文化庁(1978)は、日中両言語において意味が全く同じ、もしくは極めて近いものをS(Same)類、日中両言語において一部意味の重複がみられるものをO(Overlap)類、日中で全く意味が異なるものをD(Different)類、日本語と対応する漢語が中国語にないものをN(Nothing)類とした。文化庁(1978)は意味の側面から語彙を分類したものであるが、品詞の違いに着目して分類した研究もある(侯1997、石・王1983、張2009、熊・玉岡2014など)。もう一つは、日中間で意味や品詞が異なる語彙を一つ取り上げ、その違いがどのように生じたのかを研究するものである。このタイプの研究としては、劉(1989)、古橋(2014)、胡(2017)、呉(2017)など多くの研究がある。

本研究においても、日中同形語の意味の違いについて取り上げるが、研究アプローチの手法としては、データベースを用いた大規模分析ではなく、個別の事例についていくつか取り上げ、日中間において生じた差異の経緯について考察するというスタイルをとる。そしてそこからわかったことをどのようにしたら日本語教育へ応用可能かという問いを立て、日本語の誤用分析を通して解決を試みる。

2. 本研究で扱う日中同形語

日中同形語の問題には意味の違いと品詞の違いという二つの側面がみられる。どちらの分類においても、文化庁(1978)が示したようなS型、O型、D型、N型とい

う4分類をあてはめて考えることができる。ただし日本語教育においては正の転移を引き起こすS型よりも、負の転移を引き起こすO型、D型、N型が考察の対象となりやすい。本稿でもS型は除外して分析を行う。またN型は対応する形式を持たないということで、日中同形語のカテゴリーに含めることができない。そのためこれも考察の対象外とする。このことから本稿ではO型とD型を研究の対象として見ていく。

本稿では意味の違いと品詞による違いの両面から分析を行う。議論の導入として意味の違いと品詞の違いにおけるそれぞれのO型、D型をいくつか紹介する。(2)は意味の重複がみられるもの(O型)、(3)は意味の重複がなく、完全に異なるもの(D型)である。

- (2) 輸入、拡大、出口、熱心、生气、東西、釈放、曖昧、嚴重、緊張、失敗、依頼、対象、培養、品質、是非、運転、左右、掃除、認識

(小森・玉岡・近藤 2008:85)

- (3) 暗算、改行、求人、汽車、合同、出産、出頭、丈夫、新聞、戸口、手紙、工夫、模様、評判、約束、便宜、勉強、結構、検討、迷惑

(小森・玉岡・近藤 2008:87)

O型、D型のいずれであっても、同形語であれば元々の意味は同じであったはずである。それがある程度の年代を経て変わってしまったとしたら、意味の拡張によってその差異が生じたと考えるのが妥当である。O型であれば元々の意味が残っているということであり、D型であれば元の意味が消失してしまったと考えれば説明できる。また意味の拡張については、その用法に基づいて合理的な説明が可能である。例えば意味の拡張は隠喩(メタファー)によって説明が可能である。日本語における「あし」は人間の下肢部分を指すと同時に、椅子の「あし」や交通手段としての「あし」を表す意味機能も有する。これは椅子の「あし」が人間の足に形態的類似があるからであり、また交通手段としての「あし」は機能的類似性から説明することができる。

次に品詞の違いから見たO型、D型の例を示す。(4)はO型でかつ日本語の方が品詞のバリエーションが多いもの、(5)はO型でかつ中国語の方が品詞のバリエーションが多いもの、(6)はO型でかつ日本語と中国語で異なる品詞で 사용되는もの、(7)はD型である。なお以下のリストは熊・玉岡(2014)を参考に作成した。

- (4) 有名、安全、簡単、親切、複雑、偉大、永久、貴重、巨大、豪華、など

- (5) 黄色、科学、機械、規則、国際、一流、衛生、義務、空中、芸術、など
- (6) 以上、确实、完全、純粹、非常、一致、一定、絶対、本来、通貨、など
- (7) 一応、経由、突然、特急、一般、間接、刑事、原始、公共、緊張、など

日中同形語における品詞の違いは、日本語学習上重要な役割を果たす。なぜなら品詞の違いは統語規則に影響を与えるため、日本語の作文をする際にその点をおろそかにしてしまえば文法的に間違った日本語を産出することになってしまうからだ。したがって研究上品詞の違いに着目することは重要な意義があるといえる。例えば「科学」「機械(机械)」「規則」は日本語では名詞としてしか機能しないが、中国語では名詞及び形容詞として機能する。中国語における「科学」「機械」「規則」の例文とその日本語訳を『白水社中国語辞典』より引用して以下に示す。

- (8) a. 这些工程设计十分科学。(中)
b. これらの工事計画は科学的である。(日)
- (9) a. 科学结论(中)
b. 科学的な結論(日)
- (10) a. 他处理问题太机械了。(中)
b. 彼の対処の仕方は融通がきかない。(日)
- (11) a. 不要机械地模仿外国。(中)
b. 外国を機械的に真似してはいけない。(日)
- (12) a. 这条河流的水道原来很不规则。(中)
b. この川の流れる道は元来とても不規則であった。(日)
- (13) a. 规则图形(中)
b. 規則正しい図形(日)

(以上、『白水社中国語辞典』)

このように、中国語において「科学」「機械」「規則」は形容詞としても機能するため、単独で叙述的(8、10、12)にも限定的(9、11、13)にも使用することができる。しかし日本語では常に名詞としてしか機能しないため、そのように使うことはできない。

本稿では、日中同形語における意味の違い・品詞の違いという点に着目し、それらがどのように違うのか、また意味の違いについてはなぜそのような違いが生じたのか、という点について考察する。その際、「勉強」「無理」「上等」「必死」という4つの語彙を対象として考察を行う。これら4つの語彙はいずれも名詞としての機能を持

つが、同時に動詞や形容詞としての機能も持つ。日本語においてすべて名詞としての機能を持つのは、本来漢語はすべて名詞として借用されたからである。そしてそれらの名詞に動作性があれば軽動詞スルが付いて動詞化し、程度性があれば連体ナ形をとって形容動詞化する。「勉強」「無理」は動作性を有するため軽動詞スルが付いて動詞として機能する。また「無理」「上等」「必死」には程度性が認められるため、形容詞（形容動詞）¹⁾として機能する。「上等」と「必死」は動作性・程度性の有無という点ではパターンが同じだが、「上等」は中国語の辞書に立項されており品詞が備わるが、「必死」は中国語の辞書に立項されていない。「必死」は副詞の「必」+動詞「死」という連語関係にあり、品詞というカテゴリー内に収まらないという点で異なる。動作性、程度性の有無という点からこれらの語彙（4語）をまとめると表1のようになる。

表1. 4語における動作性と程度性の有無

	動作性	程度性
勉強	+	-
無理	+	+
上等	-	+
必死 ※中国語の辞書には 立項されていない。	-	+

次節以降、各語における意味・品詞の違いを分析していくが、「勉強」「無理」に関しては簡体字表記である「勉強」「无理」を中国語における意味・用法を記述する際に使用する。

3. 日中間における「勉強」「無理」「上等」「必死」の意味・品詞の違い

3.1 「勉強」

まず、「勉強（勉強）」の意味が国語辞典および中国語辞典ではどのように記述されているかを確認する。『大辞泉第二版』によると、「勉強」の意味・品詞は以下のように記述されている。

【勉強】

[名]（スル）

- 1 学問や技芸などを学ぶこと。「徹夜で勉強する」「音楽を勉強する」
- 2 物事に精を出すこと。努力すること。

「何時までもこんな事に一するでもなし」〈福沢・福翁自伝〉

- 3 経験を積むこと。「今度の仕事はいい勉強になった」
- 4 商人が商品を値引きして安く売ること。「思い切って勉強しておきます」

(以上、『大辞泉第二版』)

次に中国語の「勉強」の意味について確認する。『白水社中国語辞典』には以下のような定義づけがなされている。

【勉強】

[形容詞]

- 1 (一定のことをするのに) 不承不承である、気乗りがしない、しぶしぶである。
- 2 (一定の標準に達するのに) どうにかこうにかである、かつかつである、なんとか間に合う。
- 3 (人の要求を満たすには) 不十分である、無理である。
- 4 (主に連用修飾語として用い；能力は不十分ながら精いっぱいやって) どうにかして、やっとのことで、辛うじて。

[動詞]

- 5 (多く否定文に用い；したくないこと・できないことを) 無理強いする、強制する。

(以上、『白水社中国語辞典』)

両者を比較すると、品詞の面でも意味の面でも差異が見られることがわかる。品詞の面では、日本語では名詞としてのみ機能しているが、中国語では名詞としては機能せず、形容詞及び動詞として機能している。形容詞としての「勉強」の例文を以下に示す。

- (14) 我很勉强地陪妹妹到公园去了。(私はしぶしぶ妹のお供をして公園へ行った。)
- (15) 他勉强能说英文。(彼は英語をなんとかしゃべる。)
- (16) 这种理由都很勉强。(こういう理由はすべて成り立たない。)
- (17) 病人勉强喝了点粥。(病人はかろうじてお粥を食べた。)

(以上、『白水社中国語辞典』)

形容詞的用法のない日本語の「勉強」では、当然 (14~17) のような用例は成り立た

ない。

また動詞という面では、日本語の「勉強」において動詞的用法がないわけではない。多くの漢語名詞がそうであるように、動作性があれば軽動詞スルが付いてサ変複合動詞化することができる。そのため派生動詞的用法があると見てよく、条件付きではあるが、動詞として機能する点では日本語も中国語も同じだといえる。しかしながら日本語の「勉強する」と、中国語における動詞としての「勉強」とでは、意味が大きく異なる。日本語の「勉強する」は「学ぶ」「学習する」と同義であるといえるが、中国語では「無理強いする」「強制する」という意味になる。中国語の例を以下に示す。

- (18) 她不答应、就不要勉强她。(彼女が承諾しないなら、無理強いしてはならない。)
- (19) 不应该勉强别人做他不愿做的事情。(他人に無理強いしてその人のやりたくないことをやらしてはならない。)

(以上、『白水社中国語辞典』)

日本語の「勉強する」にはこのような意味はないため、品詞を同じくしても、意味が大きく異なることがわかる。

「勉強」を構成する「勉」と「強」という漢字の成り立ち、字義については、白川(2003)は以下のように述べている。

- (20) 「勉」
形成。音符は免^{めん}。力^{すき}は耒の形であるから、農業の仕事につとめることを勉といい、のちすべて「つとめる、はげむ、はげます」の意味となる。免は分娩する(子を産む)ときの姿勢で、分娩するときも、つとめ、はげむ必要があった。(白川 2003 : 575)
- (21) 「強」
会意。弘と虫を組み合わせた形。弘は弓の弦をはずした形で、その弦が弓体の外に垂れている。弓の弦に虫を加えているのは、おそらくその弦が天蚕^{てんそう}(昆虫のテグスガから取り出した糸を酸に浸し、引き伸ばして乾かした白色の糸。強い糸なので釣糸に使うことが多い)であることを示すものであろう。その弦が他のもので作った弦よりも強靱(しなやかで強いこと)であるから「つよい」の意味となり、むりに「つとめる」の意味となり、さらに、むりに「しいる(おしつける)、しいて」の意味となった。(白川 2003 : 127)

これらの漢字の意味を組み合わせれば、「勉める」ことを「強いる」ということになり、「無理強いする」「強制する」という意味を持つ中国語の方が本来の意味であることがわかる。同時に、日本語の「学ぶ」「学習する」という意味の「勉強」は元来の意味ではなく、日本において独自に発展を遂げた用法であることもわかる。

3.2 「無理」

前小節と同様、日本語の意味・品詞を『大辞泉第二版』より、中国語の意味・品詞を『白水社中国語辞典』より引用して以下に示す。

【無理】

[名・形動] (スル)

- 1 物事の筋道が立たず道理に合わないこと。また、そのさま。「無理を言われても困る」「怒るのも無理はない」「無理な言いがかり」
- 2 実現するのがむずかしいこと。行いにくいこと。また、そのさま。「無理を承知で、引き受ける」「無理な要求をする」
- 3 しいて行うこと。押しきってすること。また、そのさま。「もう無理がきかない」「無理に詰め込む」「あまり無理するなよ」

(以上、『大辞泉第二版』)

【无理】

[形容詞] (多く4字句に用い) 道理がない、無法である、無理である。⇔有理。

(以上、『白水社中国語辞典』)

このように、中国語では「道理が通らない」「理屈に合わない」といった意味で用いられ、また形容詞としての用法しか持たない。中国語における「無理」が使用されている例を以下に示す。

- (22) 无理要求 (無理な要求、不当な要求)
- (23) 无理阻挠 (不当な妨害)
- (24) 无理指责 (いわれのない非難、不当な非難)
- (25) 无理取闹 (いわれもなくもんちゃくを起こす、わざと騒ぎたてる)

(以上、『白水社中国語辞典』)

日本語においても、このような「不当な」「いわれのない」という意味で用いられる

こともあるが、そこから派生した「できない」「不可能な」という意味で使用されることが多い。中国語における意味も共有しつつ、日本独自の意味も持っている点ではこれまでの前小節の「勉強」とは異なる。

3.3 「上等」

次に「上等」の意味・品詞について観察する。まずは『大辞泉第二版』より日本語における「上等」の意味を示す。

【上等】

[名・形動]

- 1 物の品質や出来ばえなどが、すぐれてよいこと。また、そのさま。優秀。「上等な品」⇔下等。
- 2 申し分がないさま。結構。上出来。満足。「マラソンで10着に入れば上等だ」
- 3 等級が上であること。等級が上のもの。

「船賃は一にて十円か十五円」〈福沢・福翁自伝〉

〔補説〕 2は、「喧嘩上等」「左遷だって。上等じゃないか」のように、一般には避けるのが普通の物事に向こう見ずに飛びついたり、落胆するような場面でそれがどうしたと居直ったりする気分で使うことがある。

(以上、『大辞泉第二版』)

次に、中国語における「上等」の意味を『白水社中国語辞典』より引用する。

【上等】

〔形容詞〕〔非述語〕上等な、優良な、高級な。⇔下等。 (『白水社中国語辞典』)

辞書の記述からもわかるように、中国語においては位が高いという意味で一義的に用いられている。品詞も形容詞のみである。例を以下に示す。

- (26) 他在班里成绩属上等。(彼はクラスの中で成績は上位である。)
- (27) 这是上等的蜂蜜。(これは上等の蜂蜜である。)
- (28) 上等食品 (優良食品)

(以上、『白水社中国語辞典』)

日本語においても当然このような使われ方があるが、現代日本語では辞書記述の2に

おけるような「申し分のない」という意味で使用されることが多い。また辞書記述の補足にもあるように、口語において居直りの態度を表す意味で用いられることもある。日本語におけるこのような使われ方は、本来の「上等」とはかなり離れたものであり、大きく意味の拡張がなされた結果だということがわかる。

3.4 「必死」

最後に「必死」の語義について見ていこう。『大辞泉第二版』によれば、「必死」の意味は以下のように記されている。

【必死】

[名・形動]

- 1 必ず死ぬこと。
- 2 死ぬ覚悟で全力を尽くすこと。また、そのさま。死にものぐるい。「必死の形相」「必死に逃げる」
- 3 (「必至」とも書く) 将棋で、次に必ず王将が詰む、受ける方法がない状態。また、その差し手。「必死をかける」

(以上、『大辞泉第二版』)

次に、中国語における「必死」であるが、前節で引用した『白水社中国語辞典』には立項されていないが、意味をとれば「必ず死ぬ」「死を覚悟する」などとなる。したがって特定の品詞は持たず、「必」という副詞と「死」という動詞の複合語として捉えられる。辞書に立項されていないものの用語としては一般的なもので、『史記』項羽本記には以下のような記述がある。

(29) 持三日糧、以示士卒必死、無一還心。 (司馬遷『史記』)

これは、秦の大群に攻め入らんとする楚の項羽が、兵士たちに生きて帰るつもりがなく、死ぬ覚悟であることを示したものである。ここでの「必死」は「死に物狂いで」という意味ではなく、「死を覚悟して」という意味である。

『大辞泉第二版』に記されているように、日本語においても中国語におけるような「必ず死ぬ」「死を覚悟する」という意味がないわけではないが、用例をたどると古典にまでさかのぼらなければならない。「必ず死ぬ」という意味で用いられている例を『日本国語大辞典』より引用する。

- (30) 正成必死の鎌に死を遁れ (太平記 [14C 後])
 (31) 愚身は喉痛し、必死の期哀々存度者也 (多聞院日記 [1587])
 (32) とても必死の症なれば (談義本・根無草 [1763~69])

(以上、『日本国語大辞典』)

「必死」の字を見ればわかるように、「必ず死ぬ」という意味が元々の意味であるが、そのような解釈が現代日本語においてとられることはなく、ほとんどが「死に物狂いで」「死ぬ覚悟で全力を尽くして」という意味になる。それゆえ以下では日本語の「必死」から「必ず死ぬ」という意味を除外して考察を行う。

4. 日本語における意味・品詞の拡張について

前節では日中同形語における意味・品詞の違いについて概観したが、ここではそれらをあらためてまとめ、日本語における意味・品詞の拡張のあり方について考察してみようと思う。表2に、前節で明らかになった「勉強」「無理」「上等」「必死」の意味を簡略化して記す。

日中間における意味を比べると、日本語の方が意味のバリエーションが多いことがわかる。中国語でほぼ一義的に使われているものが、日本語ではいくつかの意味拡張をたどって多義化している。また元々あった意味が現在では使用されておらず、意味

表2. 4語の意味と品詞の日中比較

		中国語	日本語
勉強	意味	①無理強いすること ②しぶしぶ ③なんとか、かろうじて ④不十分	①学ぶこと ②努力すること ③経験を積むこと ④値引くこと
	品詞	形容詞、動詞	名詞、動詞 (サ変複合)
無理	意味	道理がない、無法	①道理にあわない ②実現が困難 ③しいてやること
	品詞	形容詞	名詞、形容動詞、動詞 (サ変複合)
上等	意味	上等、高級	①品質が良い ②上出来 ③等級が上 ④居直り
	品詞	形容詞	名詞、形容動詞
必死	意味	必ず死ぬ	全力を尽くす
	品詞	副詞 + 動詞	名詞、形容動詞

の重複がみられなくなってしまうものもある。以下では、日本語における各語の意味拡張について観察する。

4.1 意味について

まず「勉強」であるが、語源をたどれば「勉めることを強いる」である。これは本来中国語では第三者に対してそのような行為を強いるということであるため、被動者となる目的語が必要となる。中国語の例文 (18) (19) においても「她」「别人」という目的語(被動者)をとっている。ところが日本語における「勉強」では、そのような人を目的語にとる例文はない。「勉強」は軽動詞スルをつけて他動詞化するが、その際に目的語となるのは勉強する内容であり、何かを強いたり我慢させたりする相手がかかることはない。これは古典をたどっても同様である。『日本国語大辞典』の「勉強」の欄には、「気が進まないことを、しかたなしにすること」という意味の記述があり、これが元来の中国語の「勉強」の意味に最も近いといえる。しかしながら、これに併記されている例文を見ても、人を目的語としてとってはいない。

- (33) 「弟子今出家す。乃(すなはち)性の安ずる所にして半点の勉強(ベンキヤウ〈注〉シイテスル)なし」 通俗醉菩提全伝〔1759〕一・修元尋師入靈隠
(34) 「勉強して櫓を揺しむれば不覚睡りたり」

随筆・甲子夜話〔1821～41〕一一
(以上、『日本国語大辞典』)

このように、勉強が人を目的語にとることはなく、むしろ自動詞的に使用されていることがわかる。このことから、日本語においても「勉めることを強いる」という意味があったものの、最初から誰かに何かを強いるという意味ではなく、自らが自らに行方を課すという中動的な動詞として使用されていたことがわかる。この点が日本語と中国語の大きな意味の出発点の違いだといえよう。

中国語において「勉強」とはそもそも他者に対する行為であった。ところが日本語では行為の「強要」が他者ではなく自身に向かう語として捉えられた。他者に対して行う「強要」は、プラスのイメージにはなりえず、結果的に現代中国語の意味にあるような出来事を何とかして達成するといったやや後ろ向きなイメージになっていったのであろう。一方日本語では、自らに対する制約のような意味が出発点であり、そこから努力するという意味が生まれ、その努力の方向性が学問に向いて「学習する」という意味に、商いの方に向いて「値引きする」という意味につながっていったのだと考えられる。結果として中国語とは正反対の意味機能が備わることになってしまっ

た。

次に「無理」について観察する。「無理」は「理（ことわり）が無い」ということから、「道理が無い、通らない」という意味が元来のものである。そこから「道理が通らないこと」すなわち「実現が困難なこと」という意味へとつながっていった。またそこから「できない」という意味になって、語用論的に断りを表すことも可能である。以下に例を示す（以下、下線は筆者による）。

(35) 早乙女は画面を凝視する。桜木が遠隔操作で画面を調整し、艦橋内部の構造がスキャンされる。「舷側への攻撃はどうだ?」「空母は十層構造になっていて舷側甲板も重装甲です。魚雷は意味をなさないでしょう。艦首付近を攻撃できればいいのですが、今の海軍の魚雷では歯が立たないはずですよ」「当艦の魚雷でもか?」「無理です」「それじゃ攻撃できるのは、艦橋に設置されているレーダーと、飛行甲板にある艦載機ということか」「結果的にはそうなります」「わかった」
(BCCWJ、PB39_00107、『蒼海の盾』)

(36) 「先輩…」 ノブが、すぎるような目で一番の名を呼ぶ。「畜生～～!!」もう、誰も母ちゃんのように死なせたくなくて、医者を目指したのに… 医者になったのに…!! ノブを受け入れてくれたのは、場末の小さな病院だった。処置室には、何の設備もない。「うちじゃ無理ですよ」その病院の医者は、ノブを一目見ると、早々に匙を投げた。

(BCCWJ、LBq9_00048、『ハンドク!!!』)

このように日本語では、「道理が通らない」ということから最終的に不可能性、非実現性まで意味の幅を広げたことがわかる。

次に「上等」について見てみる。「上等」とは文字通り等級が上ということであるから、高級とか素晴らしいという意味が根源的にあると考えられる。中国語でもそのように使用されている。しかしながら日本語においては元の意味からするとやや飛躍した用例が観察される。「申し分がない」「上出来」という意味から居直りの態度を表すものである。上等、すなわち位が上ということから、素晴らしい、高級なという用法の派生については特に問題がない。そしてそこから「申し分が無い」「上出来」という意味が派生するのも理解可能だ。しかしそこから居直りを表すような「上等」はどのように派生したと考えられるだろうか。この用法を理解するためには、語用論的な解釈が必要となる。以下の例を参照されたい。

(37) 「君が助け出した者は、廢人にはせず現実に戻す。私と君との VS (パー

サス) だ」 出海は D・メフィストウの背中に向かって、「上等だ。最後の最後まで、テメエにつき合ってやるよ」 D・メフィストウはスゥーと消えていく。出海はそれを見ずに、動き出した。

(BCCWJ、PB39_00021、『迷路』)

この場合、「上等」というのは相手の態度に対する評価だといえる。そして、その相手というのは自分と敵対している立場にあることが文脈からわかる。自分に対して敵意を抱いている相手に対しては、けなすということはあっても褒める・賞賛するということは考えにくい。したがってこの場合「上等」が文字通り賞賛の意味ではないということがわかる。語用論的に、発話行為が「賞賛」であっても、「けなす」ことが発話内行為であることがある。いわゆる皮肉である。

(38) 【だれでも100点をとれるテストで0点をとった友達に対して】

「君は天才だな。」

ただし(37)では「上等」を使って相手を貶めているわけではない。なぜなら「テメエにつき合ってやるよ」という発話が直後にあるからだ。このことから「上等」が皮肉で用いられているわけではないことがわかる。この場合解釈が可能となるのは、「相手を認める」ということである。敵対する相手を褒めることは考えにくい、敵として認めるということは十分に考えられる。結果的に、「相手にとって不足はない」や、敵として認めて同じ土俵に立つ、つまり戦いを覚悟するという解釈が成立する。このような語用論的な解釈の結果、「居直り」を表すような用法が「上等」に備わったのであろう。

最後に「必死」の意味拡張を見る。本来は「必ず死ぬ」「死を覚悟する」という意味である。そこから「死ぬ気で」「死力を尽くして」という行為に対する動作主の態度や覚悟を表すようになっていった。すでに述べたように、日本語においてもかつては「必ず死ぬ」という意味がなかったわけではないが、もはやそのような用法が現代日本語では見られない。さらに言えば、「必死」が本来持つ「死を覚悟する」というやや大げさな意味すら持たないともいえる。いわば「頑張る」「努力する」という程度で「必死」が用いられるようになっていともいえる。そのような用例を以下に示す。

(39) 都議会議員候補の紹介があり、会食と歓談の始まり…。皆さんすごい勢いで食べ物に喰らいつきます。ささも必死で食べ物をゲットしましたが、ほんの

一皿分食べただけで、もう殆ど無くなってしまいました…。

(BCCWJ, OY14_35532, Yahoo! ブログ)

- (40) もう一人来たら? 「え、まだ誰かいらっしゃるんですか」「うん。そろそろ来るはずだ。万由子、もう一度コーヒーを沸かしてくれないかな?」「はい」必死に眠気を振り払いながら立ち上がる。それからしばらく、さらに無言の時間が続いた。(BCCWJ, PB29_00447, 『不安な童話』)

(39) における「食べ物をゲット」、(40) における「眠気を振り払う」という行為自体は当然死ぬ気ではないという意味ではなく、「頑張る」や「一生懸命」という意味で用いられているに過ぎない。「死」という物々しい漢字が使用されているものの、実際にその意味は形骸化してしまっていることがわかる。

4.2 品詞について

品詞についていえば、「勉強」は中国語では形容詞および動詞として機能しているが、日本語では名詞・動詞としての役割を持つ。名詞の部分に関してはすでに述べたように、中国語の語彙を名詞として借用した経緯があるからである。動詞の部分に関しては中国語の「勉強」における動作性をそのまま引き継いだ形だが、形容詞としての機能は日本語では持たないため、日本語では段階性のある概念としては捉えられていない。「無理」は中国語においては形容詞としてのみであったが、日本語においては名詞に加え動詞という品詞カテゴリーまで拡張している。「上等」に関しては「勉強」「必死」のような品詞の拡張は見られず、「形容詞（形容動詞）」としての機能を維持している。「必死」は元々は品詞のカテゴリーに収まらないものであり、「副詞＋動詞」という連語関係にある。したがって「必死」の品詞性は日本語の中で発展したものだと言えよう。

5. 日中間における意味・品詞の重複のタイプ

5.1 意味について

これまで取り上げてきた四つの日中同形語は、いずれも完全に意味が重複しているわけではない。意味の重複がみられる O 型と、意味の重複がみられない D 型に分けられる。O 型に属するのは「無理」「上等」であり、D 型に属するのは「勉強」「必死」である。ただし、前節で述べた意味の拡張を考慮すると、同じ D 型でも「勉強」と「必死」とではその意味のあり方が異なる。「必死」は日本語においても「必ず死ぬ」という意味がかつては使われていた。つまり「必死」は日中間において当初は意味の

差異がみられなかった。しかし時代が経つにつれ、日本語において「必ず死ぬ」という当初の意味がなくなり、「全力で」「頑張る」という意味へと拡張していった経緯がある。ところが「勉強」に関しては、中国語と同じような「気が進まないことをする」という意味はあったようだが、中国語に本来備わっている「他者に対して勉めることを強いる」という意味はなかった。すでに述べたように、「強いる」対象は発話者自身であり、他者を目的語としてとるか否かという点でそもそもが異なっている。したがって、出発点を同一とする「必死」とはその意味のあり方が異なっている。「気がすまないことをする」という意味は後に使用されなくなり、「努力する」「学習する」「値引きする」という意味へと発展していった。意味の出発点が異なっていることから、最終的な日中間における意味の乖離が「勉強」の方が「必死」に比べてより大きいといえる。

また、「無理」と「上等」においても同じO型ではあるものの、その意味のあり方には差異がみられる。中国語のオリジナルの意味を保っているという点では両者に違いはないが、意味の拡張の程度という点では異なる。「無理」は「道理がない」ということから動作の不可能性へと拡張した。「道理が無いことは実現が困難だ」というロジックに基づくものであり、あえて言うなら一段階の意味拡張であるといえる。一方「上等」の方は、位が上、ということから素晴らしいもの、上出来という意味拡張が起こる。ここで終われば「無理」と同じく一段階の意味拡張といえるが、「上等」に関しては、ここからさらに「居直り」の解釈へとつながっていく。既述したようにこの解釈は語用論的に導かれるもので、さらにもう一段階の意味拡張がなされたといえる。

以上のことから、D型の「必死」と「勉強」、O型の「無理」と「上等」をさらに細分化することができる。「必死」は元々の意味を等しくし、そこまで大きく意味の変わらないもの、「勉強」は元々の意味の出発点が異なり意味拡張の結果日中間で大きく意味が異なる結果となってしまったもの。前者をD1型、後者をD2型とする。O型の「無理」と「上等」は、本来の意味は等しく持つものの、無理は一段階の意味拡張、「上等」は二段階の意味拡張がみられるものである。これもD型の細分類に倣って、前者をO1型、後者をO2型と称する。

5.2 品詞について

次に品詞の重複パターンについて議論する。どのように重複しているのかをまとめ、表3のように提示する。

既述したように、漢語は基本的に名詞として借用されているため、非名詞の語彙であっても日本語において名詞化される。そのため中国語において名詞として機能して

表 3. 4 語の品詞重複関係

	Different	Overlap	Different
	日本語		
	中国語		
勉強	形容詞	動詞	名詞
無理		形容詞・形容動詞	名詞・動詞
上等		形容詞・形容動詞	名詞
必死	副詞+動詞		名詞、形容動詞

いない上記 4 語は、名詞の機能という点では重複がみられない。品詞の重複がみられ、O 型に分類されるのは「勉強」「無理」「上等」である。ただし「勉強」は中国語における形容詞の機能が日本語では捨象されている。また「無理」に関しては、日本語において動詞にまで品詞の機能拡張がなされている。このような重複のパターンを区別するために、「勉強」のような元の品詞の一部が無くなっている O 型を O マイナス型とする。一方、「無理」のような中国語にはない品詞性が新たに備わる O 型を O プラス型とする。また、「上等」は名詞を除くと形容動詞としての機能しか持たないため、O 型として扱う。「必死」は元々品詞性を持たないため、D 型に分類する。

前節における議論を基に、意味・品詞の重複パターンをまとめると表 4 のようになる。

表 4. 4 語の意味・品詞重複パターン

	意味の重複パターン	品詞の重複パターン
勉強	D2 型	O マイナス型
無理	O1 型	O プラス型
上等	O2 型	O 型
必死	D1 型	D 型

6. 日本語教育への応用

本節では、これまで議論してきた内容をどのように日本語教育へと応用すべきかを考察する。考察の仕方としては、「勉強」「無理」「上等」「必死」の 4 語が日本語の初級教科書でどのように取り上げられているかについて概観する。さらに、それらの結果と日本語と中国語との意味・品詞の重複を参考にどのような間違いが予測されるかを分析する。最後に中国人日本語学習者が 4 語を用いて作ったそれぞれの文の誤用分析を行う。そこから、実際にどのように日本語教育へ応用できるかを提案する。

6.1 初級教科書における取り上げられ方と誤用の予測

以下は、初級教科書（『つなぐにほんご初級1・2』（2017）、『みんなの日本語初級I・II本冊』（2012）、『できる日本語初級』（2011）、『初級日本語げんきI・II』（2011））において「勉強」「無理」「上等」「必死」が何課で取り上げられているかを示すものである。

表5. 初級教科書における対応表

	つなぐにほんご	みんなの日本語	できる日本語	げんき
勉強	4課	8課	3課	3課
無理	12課（無理な） 21課（無理をする）	19課（無理な） 32課（無理をする） 49課（無理に）		20課（無理な）
上等				
必死				

表5からわかるように、各語の取り扱い方は様々である。具体的に見ていこう。「勉強」は全ての教科書で早い段階で取り上げられている。「勉強」という言葉は、まさに日本語を「勉強」している日本語学習者にとっては日常生活においても使用頻度も高い。教科書での取り上げられ方と使用頻度が相関すると仮定するなら、「勉強」は使用頻度が高いと言え、それについての異論はないだろう。この考え方に従えば、3つの教科書で取り上げられている「無理」も使用頻度が高いと言える。反対に、「上等」「必死」は本研究で考察の対象とした初級教科書のいずれにおいても取り上げられていない。これらは「勉強」「無理」に比べれば使用頻度が低いことは想定できる。初級の教科書で取り上げられず、使用頻度も低いとなれば、中国語の意味や品詞をそのまま転用する可能性は高くなると言える。このような使用頻度という観点からも中国語母語話者の誤用を予測していきたい。

具体的に見ていこう。まず、D2・O マイナス型である「勉強」は全ての教科書で取り上げられており、使用頻度も高いことから誤用の可能性は極めて低いと考えられる。しかしながら、意味が拡張した「値引く」という用法はいずれの初級教科書にも取り上げられていない。「勉強する」を「値引く」という意味で使うことは日本語母語話者においても極めてまれであるため、教科書だけの学習では習得は困難だと推察できる。

O1・O プラス型に分類される「無理」は3つの教科書において取り上げられているものの、取り上げられ方にも違いがみられる。形容動詞、動詞（軽動詞を共起したもの）、副詞的用法（形容動詞の連用形）の3つの用法すべてを取り上げているものは「みんなの日本語初級」1冊のみであり、「つなぐ日本語初級」は形容動詞、動詞

のみ、「げんき初級」は形容動詞のみが取り上げられていることが分かる。「無理」は日本語では2つの品詞（形容動詞、動詞）として機能するが、中国語においては形容詞のみの用法である。また、意味は重複するため母語干渉は少ないと予測できる。半面、軽動詞を用いた動詞用法や形容動詞の連用形による副詞的用法は中国語にその用法がないため意識して学習させなければ習得できないと言える。

それでは、初級教科書に取り上げられていない「上等」「必死」はどうだろうか。まず、O2・O型の「上等」に関して言えば、日本語の場合、形容動詞と名詞になり得るが、中国語は形容詞用法のみである。初級教科書で取り上げられることが少ないことを鑑みると、中国語の「高級」という意味の形容詞用法（日本語の場合形容動詞用法）の使用が多くみられ、名詞として使用されることは少ないと予測できる。また、日本語の場合、「居直り」を表す意味の拡張がみられるが、これは特定の状況でのみ成立する用法であり、汎用性が低く、表現としても丁寧さに欠けるため教育の現場で取り上げる必要性はないだろう。

次に、「必死」は日本語の場合、名詞、形容動詞、副詞的用法（形容動詞の連用形）として機能するが、中国語は、「必死」は「必ず」（副詞）+「死ぬ」（動詞）の2語である。初級教科書で取り上げられておらず、「勉強」程使用頻度が高くないことを鑑みると、初級段階で習得しない限り中国語の意味の「必ず死ぬ」という意味で使用する中国語母語話者が多いのではないかとと言える。

6.2 中国語母語話者による作例と誤用分析

ここでは、誤用分析を行う。対象は大手前大学に在籍する中国人留学生（1年生～4年生）計25名である。各語を用いて一文ずつ作成してもらった。いずれもレベルは中上級であるため、4つの語彙のすべての意味や品詞を習得している可能性はあるが、誤用分析の予測と結果について考察する。なお、「勉強」については使用頻度も高く、今回の作例で誤用が見つからなかったことから、「勉強」に関する分析は割愛する。

6.2.1 「無理」

以下は誤用だと判断できる作文である。当該の語彙以外の誤用部分には下線をしてある。

- (41) 無理のことをやめてください。
- (42) 無理のわけだ。
- (43) 先生に敬語を言わないなんて、無理な表現だ。

(44) 先生に悪口を言うのは無理だ。

「無理」は初級教科書3つで取り上げられており、使用頻度も高いことから誤用が少なかった。誤用が確認されたのは25例中4例に留まった。具体的に見ていくと、「無理」の誤用には主に2つのタイプがみられた。(41) (42) はいずれも「の」が誤用であり、統語的に正しい日本語は「無理なこと」「無理なわけ」である。日本語の場合、「無理」は連体ナ形を取る語であり、この場合形容動詞として機能する。中国語も同じく形容詞として使用される語である。従って統語的条件からは誤用が起きないと推察できるが、実際にはそうではない。なぜなら、中国語には名詞を形容詞や名詞で修飾する場合、「的」で接続するという統語的規則があるからである。この「的」を中国人学習者は日本語に直訳する場合、「の」に変換していることが多い。つまり日本語の「無理」の品詞を考慮せずに、中国語の統語規則を日本語作文にそのまま応用し、「無理の(名詞)」としていると分析できる。このことから、「無理」の意味の差異を教えるだけでなくその語彙が持つ品詞性も教える必要性があることが分かる。

次に、意味の拡張という観点からの誤用について分析する。(43) (44) がそれに相当する。(43) は中国語の「道理がない」という意味で用いられており母語干渉の例だと言える。また、(44) の「無理」は「言えない」という意味で解釈すれば成立する。しかし、中国語の意味に「道理がない」「無法」という意味があるが、これらの意味で解釈したほうが成立する。日本語の意味で用いているのか中国語の意味で用いているのか判別が難しいが、「道理がない」で解釈した方が自然な以上、母語が干渉している例とも言える。なんとなく成立しているような例でも当該の語彙の中国語における意味を教師が理解していれば、母語が干渉しているかどうかの判別が可能であり、誤りを見逃す可能性は減るだろう。尚且つ、当該の語彙が日本語ではどのような意味で用いられるか、中国語との意味の差異を正しく指導できるのではないだろうか。

6.2.2 「上等」

「上等」はいずれの初級教科書においても取り上げられていないため、あまり日本語母語話者においても使用頻度も多くないと推測できる。初級教科書で学習せず、また耳にすることも多くなければ中国語の意味を転用する可能性は高くなると考えられる。以下は留学生が作例したうちの、誤用と判断できる例である。

(45) 上等な牛乳の名前を教えてください。

(46) 人間は最も上等な動物でしょうか。

(47) インドの社会は4つに分けられ、一番上等なのは神の子供みたいな人です。

- (48) 80点の成績は上等だと言えます。
- (49) お母さんは上等な人だ。
- (50) 上等の人の生活はどうですか。
- (51) 上等的な日本料理です。

上記のように25例中7例に誤用がみられた。(45)～(51)はいずれの場合も中国語の意味の「高級(位が上)」という意味で用いられると考えられる。(45)は「上等な肉の名前を教えてください」なら成立することから鑑みると、日本語の場合の「上等」はそれで形容される名詞そのものが「上等」、つまり金銭的価値が高く、高級感を伴うものである場合が多い。一方、中国語の場合は、修飾される名詞が「牛乳」でも「肉」でも成立し、その中での位が上のものを指すようである。単純に修飾される名詞の位が上のものを指す中国語と修飾される名詞そのものに高級感がなければ成立しない日本語とでは意味にある程度の重複がみられるため中国語の意味のまま使用しても成立する場合もあれば、(45)～(51)のように不自然な例もある。

次に統語的な問題について論じる。日本語の「上等」は名詞用法と形容動詞用法の2種類あるが、中国語は形容詞用法しかない。それが影響しているからか、「上等の(名詞)」という名詞用法(この場合、絶対形容とも言う)として作例している例は25例中3例に留まった。また、意味が拡張した「居直り」としての用法で作例している例は無かった。

6.2.3 「必死」

「必死」は本稿ではD1・D型に分類される。つまり、もともとの中国語の「必ず死ぬ」という意味とさらに「全力を尽くす」という意味を持つ。以下は「必死」が誤用だと判定できる例である。

- (52) この病気は必死だ。
- (53) 自動車にひかれても必死ではない。

上記の2例は中国語の「必ず死ぬ」という意味で「必死」を用いているといえ、母語干渉であると言える。「必死」の誤用は25例中この2例に留まった。「必死」は初級教科書で取り上げられず、使用頻度も「勉強」や「無理」程高くないことを鑑みた場合、中国語の意味での「必死」で作例する例が増えると予想したが実際にはそうではないことが分かる。現代の日本語の「必死」は「全力を尽くす」「一生懸命」「全力で」などの意味で用いられており、中国語の「必ず死ぬ」とは意味が異なる。また、中国語

の「必死」は「必ず」(副詞)+「死ぬ」(動詞)という2語から成り立っている。それに対し、日本語は一語であり、形容動詞用法、名詞用法にもなり得る。つまり、中国語と日本語とでは意味の面からも統語的性質という点からも全く異なるのである。つまり、意味も品詞も全く異なる場合、習得しやすいと考えられ、母語の干渉を受けにくいのではないだろうか。

6.3 まとめと日本語教育への応用

本章での分析結果をまとめる。まず、意味的にD型に分類される「勉強」「必死」は母語の干渉を受けにくいことが分かった。また、意味的にO型に分類される「無理」「上等」はD型に比べると誤用が多いと言える。さらに、品詞の重複パターンを見るとD型である「無理」よりもO型の「上等」の方が誤用が多い。これらをまとめると以下ようになる。[]の中の数字は誤用例である。

(54) 勉強 [0] < 必死 [2] < 無理 [4] < 上等 [8]

これらの結果を日本語教育に応用することについて言及したい。まず、「勉強」の「値切る」や「上等」の「居直り」などの意味の拡張用法に関しては作例がなかったことから、こちらが取り上げない限り習得は困難だと言える。だが、使用頻度は上記の2つともそれほど高くないためわざわざ取り上げる必要性は低いと言える。問題は中国語と日本語の意味が重複している「無理」と「上等」である。「無理」は中国語においては形容詞であるが、日本語は形容動詞用法、動詞用法の2種類、形容動詞の連用形を用いた副詞用法も含めれば3種類ある。中でも動詞用法の誤用は見られなかったが、副詞用法の「無理に」の作例が一例も見られなかった。「無理」は初級教科書においても取り上げられるがその際、「無理」の意味と同時にその品詞性についても言及する必要がある。そして、「先生に悪口を言うのは無理だ」のように、「無理」の中国語の意味「道理がない」「無法」を把握しているからこそ誤用だと判別できる場合もある。従って、日本語教師は作例した文の適正が明確に判別できない場合、当該の言葉の中国語の意味を調べる必要があると言える。中国語の意味を把握することによりなんとなく不自然な理由が明確になり、結果誤用を防ぐことができるのではないだろうか。

次に、「上等」である。「上等」は中国語の意味は「品質などのレベルが高い」ことを表すが、日本語の場合「上等」で修飾される名詞には、名詞そのものが高級感を有さなければならない制約があった。つまり、「上等」という意味だけでなく「上等」がかかる名詞の制約についても把握しておく必要がある。これを明らかにするために

は中国語と日本語の対象研究というよりも、日本語の「上等な N (名詞)」が成立する状況を詳細に分析することが求められるだろう。

以上のことから、日中同形語「勉強」「無理」「上等」「必死」を日本語教育で取り上げる際には、中国語における意味だけではなく、中国語においてどのような品詞で用いられるのかを考慮に入れたうえで、日本語の当該の語彙の成立条件を詳細に分析する必要があるといえよう。そして、日本語と中国語で意味と品詞の面で重複している箇所が多ければ多いほどその用法の指導に注意すべきである。

7. まとめ

本稿では、日中同形語の「勉強」「無理」「上等」「必死」について、意味・品詞の両面から日中間における差異を観察した。そしてその各語における意味・品詞の差異が日本語学習にどのように影響を及ぼすのかという観点から、日本語の誤用分析を行い、日本語教育においてどのように応用可能であるのかを分析・考察した。

本稿で取り上げた4語はいずれも中国語から日本語に借用された後、独自の意味・品詞性を備えて行き、同形語でありながら異なる用法を持つに至った。その在り方は各語で異なり、「必死」が意味の面でも品詞の面でもその異なりが大きく、「上等」が最も小さかった。日本語学習のどの段階で取り上げられるのかという点も関与するが、意味・品詞の面で日中間で重複が大きければ大きいほど誤用の産出が多くなることが、本稿での分析で明らかになった。この分析結果はやや意外なものと言える。なぜなら、重複する点が多ければ多いほど間違いが起こりにくいのではないかと想定されるからだ。しかしながら意味や品詞が同じであっても、文脈を加味した上で自然な日本語になるかならないかというのはまた別の問題である。そして意味・品詞の面で重複が多いからこそそのような問題が等閑視されてしまい、結果として中国語では問題ないものの、日本語では不自然と感じられる文章の産出に至ったのだと考えられる。

本稿でとりあげた4語のうち、誤用が確認された「無理」「上等」「必死」については、どのように教えるかという点からさらなる分析が必要だといえる。それらの問題については今後の課題としたい。

注

- 1) 本稿では加藤(2003)に倣い、形容動詞を認めない立場を取るが、辞書における記述を引用する都合上、「形容動詞」という用語を用いる。

参考文献

- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2011) 『初級日本語げんき I 第二版』ジャパントタイムズ.
- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2011) 『初級日本語げんき II 第二版』ジャパントタイムズ.
- 伊地知善継 (編) (2002) 『白水社中国語辞典』白水社.
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.
- 金丹 (2017) 「日中同形語における二文字漢語についての一考察」『思言：東京外国語大学記述言語学論集』13、87-94.
- 胡新祥 (2017) 「漢語「差別」についての考察：日中語彙交流の視点から」『立教大学大学院日本文学論叢』17、253-271.
- 呉夫迎 (2017) 「日中同形語「犠牲」と「犠牲」についての比較研究」『日中語彙研究』7、79-92.
- 侯仁峰 (1997) 「同形語の品詞の相違についての考察」『日本学研究』6、78-89.
- 白川静 (2003) 『常用字解』平凡社.
- スリーエーネットワーク (編) (2012) 『みんなの日本語初級 I 第二版本冊』スリーエーネットワーク.
- スリーエーネットワーク (編) (2012) 『みんなの日本語初級 II 第二版本冊』スリーエーネットワーク.
- 石堅・王建康 (1983) 「日中同形語における文法的ズレ」『日本語と中国語の対照研究』5、56-82.
- 熊可欣・玉岡賀津雄 (2014) 「日中同形二字漢字語の品詞性の対応関係に関する考察」『ことばの科学』27、25-51.
- 張麟声 (2009) 「作文語彙に見られる母語の転移—中国語話者による漢語語彙の転移を中心に—」『日本語教育』140、59-69.
- 辻和子、小座間亜依、桂美穂 (2017) 『つなぐにほんご初級1』アスク.
- 辻和子、小座間亜依、桂美穂 (2017) 『つなぐ日本語初級2』アスク.
- できる日本語教材開発プロジェクト (2011) 『できる日本語初級』アルク.
- 文化庁 (編) (1978) 『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局.
- 古橋ふみ子 (2014) 「“坐”(すわる)が“乗”(乗る)になるまで」『日中語彙研究』4、67-93.
- 松村明 (編) (2012) 『大辞泉第二版』小学館.
- 劉学新 (1989) 「「妻」を意味する語彙について—現代日中両国語の比較研究—」『奈良教育大学国文：研究と教育』12、1-11.